

第37回 平成28年1月1日
発行 東京都立東部療育センター
広報委員会
東京都江東区新砂3-3-25

二〇一六年 申年の新春を迎えて

東京都立東部療育センター
院長 加我 牧子



新年の挨拶にて
(東京都立東部療育センター 院長 加我 牧子)

あけましておめでとうございませう。この一年がみなさまにとって実り多い、心にとほる年になりますように願っております。

東京都立東部療育センターは平成十七年十二月一日に開設され、昨年十二月、開設十周年の記念の時を迎えました。当センターは重症心身障害児・者の保護者の皆様の熱いご要望を受け、山崎孝明現江東区長の使命感、石原慎太郎もと東京都知事の大英断をいただき、数えきれないほど多くの方々のおかげで誕生しました。誕生後も信じられないほど多くの方々のお力をいただき、重症の方でもとりわけ重症な重症心身障害児・者を長期入所、短期入所、医療入院の形で病棟におあずかりし、成人と乳幼児のための通所部門を有し、さまざまな障害をお持ちの方々の外来診療を行っています。

当センターは長年にわたって小児神経学のトップリーダーである有馬正高名誉院長の、障害児医療のご経験と知識を昇華する志のもと、高度の医療と療育の技術、そしてハートをもって、スタッフ一同協力し、ひきつづき利用者みなさまの命と暮らしを守り、高める努力を続けていきたいと思っております。そしてスタッフ一

同の経験と技術・知識を、同じように重い病氣、重い障害をお持ちの皆様にもお伝えできるように取り組みも進めて参りたいと思っております。

昨年十二月、マリンスキー・バレエの白鳥の湖公演を堪能しました。幸運なことには五十名前後の一流のバレエダンサーたちの直前のステージ練習を客席から見学できました。ダンサーたちが四本のレッグスンバーの両側でウオーミングアップをしていると、まもなく舞踊監督が登場し、客席を見て「オツツコレハコレハ、オハヨウゴザイマス」と言って客席の私たちをちょっと笑わせた後、すぐに団員たちに向い合い、彼のリードでピアノに合わせてバレエの準備運動というか見事な基礎練習が始まりました。

一流のバレエ団だけあってそれぞれの体の動きは大きく、美しく、見とれてしまいました。実はみなさんの動きが完璧にそろっているわけではないらしいことも感じました。練習が始まってもしばらくシューズを履きなおしている人がいたり、いっせいにあげた足の高さが結構違って見えるように見えたり、意外にバラバラに思えたものです。それでも公演のステージではそんなことが気にならない場面はなく、観客をみごとに美しい世界にいきなってくれたのはやはりプロの仕事と思えました。プロ集団ではなく、全体の調和と感動に至る

ことは、私たちの日常の世界でもあってほしいことだとも、またありうることだとも思えました。

重症心身障害のある方々はただただ弱い者というわけではなく、存在自体に命の力強さを持っていらっしゃる方々でもあることは日常感じるところでもあります。「この子らを世の光に」という軽やかにして、実は重い言葉を残され、知的障害児のための近江学園、重症心身障害児のためのびわこ学園を創立された糸賀一雄先生のプロフェッショナルの思想について、あらためて思いをはせています。

重い病氣、重い障害をお持ちの方々のための医学医療や療育、リハビリテーションに力を尽くせる世の中は、命に対する価値観や感性を大切に考えられる社会でもあります。二〇〇五年、当センター開所式で当時の石原都知事は、日本人の生命に対する感性、価値観によって人々が協力して当センターを誕生させたこと自体が人類の将来にとっての誇るべきモニュメントになりうると思うとのご挨拶をなさったとのこと。東部療育センター十年間の歴史の背景にある重症心身障害児医療と福祉の歴史の意味を考え、語り継ぎ、これからの十年に向けこのことをあらたに、東部療育センターの第二章を開いていきたいと思っております。今年も皆様のご協力とご支援をお願い致します。

クリスマス会

今年もおまちかねのクリスマス会が開催されました。利用者様が出演する劇や楽器演奏、新しく入職した職員たちによるダンスやマジックショーなど、どの病棟も工夫を凝らした催し物が企画され、大変盛り上がり 있었습니다。また、今年一年間の様子や開設十周年を振り返るスライドショーが上映された病棟もありました。懐かしさに涙するお母様もいました。シャネルリーで乾杯しながらサンタさんからのプレゼントをもらい、わくわくドキドキの一日だったのではないのでしょうか。(療育部)



写真上↑ サンタさんからプレゼント (病棟)
写真左上↑ サンタ集団に囲まれて・・・
写真左← みんなに振舞われたクリスマスケーキ!

写真右→
みんなでトナカイ!
お母さんはサンタさん?
(乳幼児通所)

写真下↓
サンタに変装!



十月七日に第十回オータムフェスティバルが開催されました。ぼれぼれの可愛い演奏でスタートです。ゲームでは商品を買って！恒例のミュージックボックスさんのすばらしい音楽とフラダンスの情熱的な踊りに感嘆の声があがりました。作品展も個性豊かな作品がたくさん！今年も病棟・通所の皆さんが協力して十周年記念作品を制作し講習でした。フィナーレのバンド演奏で盛り上がり幕を閉じました。皆様ありがとうございました。来年も盛り上がりましょう。(療育部)



本場の踊りに圧倒されました。
フラダンス!!

オータムフェスティバル



フェスティバルのフィナーレ!
なのはなバンドによる演奏



お母さんといっしょ
(ぼれぼれ)



みんなで歌いました
(ミュージックボックスさん)

十周年記念式及び祝賀会



有馬正高理事長 挨拶の様子

十二月当センターは開設十周年を迎えました。十二月十一日に浦安のホテルの会場を借りて、記念式と祝賀会を行いました。来賓等六十名と職員等一六〇名、合わせて二二〇名ほどの参加者がありました。

来賓の皆様方からは、センターが東部地域に初めてできた重症心身障害児(者)施設であり、地域の方々の強い願いによってできた施設であること、また特に障害の重い超(準超)重症児(者)の療育と在宅療育の地域支援を大きな役割としていることなどの挨拶がありました。続いて、祝賀会では、来賓の方々や職員等も一緒に職員の方々のダンスやバンド演奏などを楽しみ、また、センターの開設から十年間のスライドを懐かしみ、最後には、皆で手を繋ぎ一同一丸となり、より良い療育環境を提供できるよう努力していくことを確認しました。



職員バンドの様子

事務次長 佐藤

通所者保護者懇談会

十二月十七日にセンターと通所者保護者の懇談会が行われました。十五名のご家族が参加され、センターの第三者委員である高原委員、須田委員にもご参加いただきました。参加されたご家族お一人お一人からセンターへのご意見等伺いし、今後のセンター通所のことや、地域施設や区での重症心身障害児(者)の受入れ等についての話を中心にご意見が聞かれました。

センターでは、関係機関の研修の受入れや施設への支援等、センターの持つ人材やノウハウを活かし、地域資源の開発等を行いながら、今後も区や地域施設との連携を深めていければと考えています。(地域支援室)

報告 日本重症心身障害福祉協会 東日本施設協議会報告



会場の様子

十一月五日、六日に於いて東日本施設協議会が開催されました。今年度は秋津療育園が主幹事で他の都内施設が協力する形で行われました。「重症心身障害児(者)の豊かな生涯とターミナルケア」をテーマとして、千葉徳州会病院緩和ケア内科部長の渡邊敏先生の「緩和医療について」の特別講演と、保護者、作業療法士、看護師、医師によるシンポジウムなどが行われました。

シンポジウムでは、保護者の立場から、当センターに入所している利用者のお母様が現在ボランティア活動をしていただいている村田恵美子様が、在宅で頑張っている下さいました。その他、東京小児療育病院の小畑恵子作業療法科長、東部訪問看護事業部の鈴木弘子部長、東大和療育センターの倉田清

子院長が、重症児(者)の豊かな生涯を送るための取組みなどの発表のあと活発な意見交換が行われ、内容の濃い協議会となりました。当センターからは岩崎副院長、山田看護科長、水野事務長が出席し、特に村田様のお話からは「医師やスタッフの何気ない一言がご家族を悲しい気持ちにさせたり苦しめたりすることがある」ということを改めて感じ、「私達はもっと想像力を働かせて患者様やご家族に接していかなければならない」と強く思いました。(事務室 水野)

研修 地域施設向け研修会 『加齢変化と摂食支援』

地域療育支援室では、地域の療育に関わる機関の職員に向けた研修会を、年に数回開催しています。今回は、センターの栄養科やリハビリ科の協力を得て、「加齢変化と摂食支援の実践」というテーマで開催しました。

前半は、リハビリ科の山際作業療法士より、解剖学的な観点から見た摂食や嚥下に関する身体の機能、および、実際のVF(嚥下造影)動画で嚥下時の咽頭部分の動きを確認し、基礎的な部分の理解を深めました。また、姿勢・運動の加齢変化に伴う摂食嚥下機能・器官の変化により起こりうる誤嚥の状態、具体的な事例の紹介と、食事の工夫(姿勢、介助方法、嚥下補助食品)

後半は栄養科の村松主査より、代謝の邪魔をしない方法かつエネルギー摂取量を減らさないことを目標とした、食事の調整方法(形態、食事量、食べる意欲)や在宅で活かせるさまざまな工夫のしかたについて、実際の栄養剤の試食もしながら食事環境の大切さについても学びました。

今回の研修会は、計二十七名もの方に参加いただきました。今後、地域の皆さんへのより良い療育の一助となる研修内容を提供出来ればと考えています。(地域療育支援室)



研修の様子

第二十六回 重症心身障害療育学会学術集会

十月一日、二日と二日間、東京のバルテノン多摩で第二十六回重症心身障害療育学会学術集会が開催されました。合計九十二題の発表が行

われましたが興味深いものも多く発表後には活発な議論や意見交換がありました。センターからも三題の発表があり、発表者の皆さんも堂々と意見

全国重症心身障害日中活動支援協議会

十月八、九日に熊本で行われた、全国重症心身障害日中活動支援協議会に参加させて頂きました。一日目は行政側から現状の報告と今後の支援を法的にどう手直ししているかの説明のあと、シンポジウムがありました。テーマは「ショートステイのバリアフリー」でした。九州地区でもショートステイ先がなくてきず

にいたる現状があり、ローリングベッドやレスパイト事業の推進を図っているということでした。二日目は分科会から始まり、私は「日中活動」に参加しました。各施設の発表を聞き、個性を生かす活動や地域に出ているかについて生きがいを見つけていくか、施設内でもよりよい支援、援助方法を追求していることがよ

第十一回 東京都福祉保健医療学会

十二月十七日、東京都福祉保健医療研修センターで第十一回東京都福祉保健医療学会が開催されました。学会では口頭発表が四十三題、ポスターセッションが五十六題と多くの発表がありました。

シンポジウムでは、海外旅行者の増加に伴って、感染症もグローバル化の傾向があり、その感染症がどう広がるかは多様なルートがあるため、特にすべての医療従事者は日頃から標準予防策を徹底する意識とあらゆる想定

を持つことが大切であるとのことでした。感染症対策の仕組みにおいて、センターでもスタンダード・プリコーションの大切さを実感しました。基本的な対策をまずはしっかりと継続することが特に支援科の私達にできる第一歩であると思えました。(二階南 杉本)

【十一月】

気温の低下とともに、山の方から徐々に紅葉が始まってきました。今年初めての取組みで、四日〜六日に両国高校附属中学校の生徒三名の職場体験を受け入れました。この体験が今後の彼らの生き方に良い影響を与えてくれれば嬉しいですね。

【十二月】

世界では平和を危ぶむ事件が起きていますが、我が国では今月は、明るい話題が多くありました。大村智氏と梶田隆章氏のノーベル賞授賞、小笠原探査機「はやぶさ2」と金星探査機「あかつき」の軌道投入成功、その他スポーツ界での日本人の活躍・・・など。そしてセンターでは開設十周年を迎え、一日の開設記念日には、利用者は特別メニューの昼食で祝いました。また十一日には多数の来賓を迎え記念式を挙行し、十周年の節目にセンターの更なる発展を誓いました。



センター十周年記念作品

東部あれこれ

十月から十二月の話題です。

【十月】

十月は比較的良好な天候に恵まれ、オートラマフェスティバルや遠足などの行事を楽しく行うことができました。また、特別支援学校の修学旅行や社会見学にも医師やスタッフが付き添って学齢児が参加しました。十月の終わりにセンターの中はハロウィン一色に染まり、季節の風物詩となっています。

編集後記

明けましておめでとうございませう。新春を新たな気持ちで迎えられる事とお喜び申し上げます。東部療育センターは、開設から十年を経過し、十一年目を迎えました。利用者の方々やそのご家族を始め、職員一同一丸となり、より良い療育環境を提供できるように、気を引き締めていきたいと思っております。

←これまでのわか草をこちらからどうぞ

